

終章

仕事柄、区内の工場や商店街を訪問する機会が多くなっている。そこで、社長や商店主から聞かされる声は、新聞報道等で伝えられるような景気の回復ではなく、出口の見えない厳しい実態である。

「商店街の人通りは多いのに、なかなかお客さんがお店に入ってくれないんですよ」「仕事量はあるんだけど、儲からないんだ。」と商店街でも、工場でも同じようなため息が聞こえてくる。

このため息の理由は、いとも簡単に列挙することができる。商店街では安い品物を探してスーパーや安売り店の梯子をする消費者が多くなっている。実質所得が減少する中で、消費者の購買スタイルが変わっているのだ。一方、製造業の現場では、生産拠点の中国への移転が加速しているなかで、中国との価格競争が激しくなり単価ダウンの要求が厳しくなっているからである。その他にもあるだろうが、目新しい理由はないはずである。

しかし、ため息や愚痴だけの経営者や商店主は少なく、新製品の開発、新しいイベントの企画等新しい分野へチャレンジしている方々も多くなっている。私たちもお話をうかがっていて、産業の未来に明るい希望を託すことができる。

10年以上前には、我慢していれば先行きが明るくなる見通しを立てることができた時代があった。しかし、現状を見渡すと、産業をめぐる環境は経済のグローバル化、ITの進展により大きく変化し、そのスピードは加速化している。もう、ビジョンという言葉は、時代の流れに逆らえなくなっているかもしれない。

このような中で、共同研究において「板橋区の産業振興ビジョン」について研究を深めていくことは、相当に困難な営為であるように思われる。でも、私たちの眼差しが、区内の工場や商店などに近づいていけば、微かな足がかりは見えてくるはずであり、そこを根拠として、新しいパースペクティブに届くように思われる。